

啄木の洪民小学校ストライキ事件と 北見北斗高校応援歌

函館市医師会
函館渡辺病院

水関 清

石川啄木の名を後世に残す歌集『一握の砂』は、5章7節で編まれている。ツルゲーネフの小説「Smoke」にちなんで名づけられた「煙」の章では、「煙（一）」で盛岡中学校時代の青春の思い出を詠み、「煙（二）」では、ふるさと洪民の思い出をうたっている。その「煙（二）」の巻頭歌は「199 ふるさとの訛なつかし／停車場の人ごみの中に／それを聴きにゆく」、章末歌は「252 ふるさとの山に向ひて／言ふことなし／ふるさとの山はありがたきかな」である（各歌巻頭の数字は、『一握の砂』掲載歌の通し番号、以下同じ）。故郷にここをつなぐために上野駅を行き交う人々の声の中に「訛」を探しに行った啄木が、ふるさとの山に向かってその思いを確かめるといふ、望郷の思いで貫かれているのが、この章なのである。

54首からなる「煙（二）」は、さらに17首・20首・17首という3つの歌群に分かれるが、冒頭17首では故郷である洪民村への複雑な心境が詠われている。「210 かにかくに洪民村は恋しかり／おもひでの山／おもひでの川」「214 石をもて追はるごとく／ふるさとを出でしかなしみ／消ゆる時なし」蒸気機関車の煙突から吐きだされる煙は、一見すると変幻自在で捉えどころのない存在であるが、機関車の推進力は石炭を燃やすことで得られるのであり、それにとまって生まれてくる存在が煙なのである。啄木が章題として「煙」を選んだのは、洪民を単に回想するだけでなく、村での暮らしと密接にかかわる活動を表現する意図も込められていたからと思われる。

啄木の年譜を繙くと1907（明治40）年4月19日の項に「高等科の生徒を引率、村の南端平田野に赴き校長排斥のストライキを指示、即興の革命歌を高唱して帰校、万歳三唱して散会」という記載がある（人物叢書『石川啄木』岩城之徳）。その歌詞は次のようなものであったという（上田庄三郎「青年教師石川啄木」三一新書、1956）。

“山も怒れば万丈の 猛火をはいて天をつき
緩（ゆる）けき水も激しては 千里の堤（つづみ）
やぶるらん
わが洪民の健児らが おさえおさえし雄心の
ここに激しておさまらず
正義の旗をふりかざし 進むはいずこ学校の
宿直べやの破れ窓
破れてかざす三尺の 凱歌をあぐる時は今”

ここに歌われた「学校の宿直べや」の主は、当時の洪民村小学校校長・遠藤忠志、一家4人で学校の宿直室に起居していたのである。1905（明治38）年、

岩手県の米作は平年の66%にとどまる凶作で、啄木の住む岩手郡の生産高は県下14郡中で8位に甘んじていた。当時の啄木の月収は8円、村内最高とされた遠藤校長のそれは16円で啄木の2倍ではあったが、その置かれた社会的地位や扶養家族から考えて、生活現実に大差があったとは考えにくい。

当時の洪民村は、小学校に郡内2番目の高等科を設置して初等教育に力を入れており、1906（明治39）年には代用教員として啄木と、郡内初の女性訓導として上野さめ子が採用され、遠藤校長、秋浜市郎首席訓導とともに、洪民小学校の教員は総勢4名であった。ちなみに「煙（二）」の第3歌群の中では、上野訓導にまつわる好意的な4首が詠われている（240～243番歌）。

その上野さめ子（後に結婚して、瀧浦さめ子）は、洪民小学校時代の同僚として、以下のように回想している（吉田狐羊：啄木とクリスチャンの女教師、「啄木発見」洋々社、1966）。

「石川さんは熱心で、生徒たちは慕って居りました。お話も文学だけでなく、えらい人物との交際ぶりを得意になって語る人で、煙に捲かれたものです。ただ、私などの尊敬できる人ではありませんでした。これは村の一部の人達から余計な噂を耳にしていたせいかも知れません。私が洪民小学校を去ってから、有名なストライキを起こしたのですが、相手にされた遠藤校長先生などは好人物で、石川さん一流の茶目気からやったものとはかと思えません。当時、私は一年生を、石川さんは二年生を、校長先生が高等科を担当していましたが、石川さんは高等科を受持たかったのです。無資格の代用教員では、校長先生も承認できなかったのは当然です。その不満を充たすつもりで、石川さんは高等科の生徒の希望者に、放課後に二時間も三時間も英語を教え出したのですが、学校の一室に常宿直のようにして家庭をもつ校長先生にしてみると、何かつらあてがましく感じられたのも無理はなかったのです。」（大意要約）

このストライキ騒動の後で生活に窮した啄木は、新詩社がつてで函館の首宿社同人を頼って北海道にやって来て、札幌、小樽、釧路とめぐる漂泊の1年を送り、その体験がのちに『一握の砂』の「忘れがたき人人」に結晶するのである。

1962（昭和37）年当時、北見北斗高校で歌われていた応援歌その2と、啄木が高唱したストライキ歌との酷似に気付いた在学生在がいたという（森山弘毅：歌謡（うた）つれづれ57、2002）。同校図書館刊行の「本棚」20号に収載された読書感想文『「大逆事件」と啄木の思想』によると、以下がその歌詞である。

“山も怒れば万丈の 煙を吐いて天を衝く
緩けき水も激しては 千丈の堤破るらん
見よ若人の意気高く 堂々（ほこ）とる北斗軍”

微妙な差異はあるものの、まさにそっくりである。洪民で高唱された即興の革命歌が、どこをどうして北見に伝わったのだろうか。隠された啄木のロマンなのである。